

拜復 延與雄一郎様

今年も早いもので師走を迎えました。

「冬来りなば春遠からじ」と申しますが、北海道十勝の冬の厳しさは、少しの降雪でおたおたする東京人には到底想像出来ないものと思います。

特に畜産という、家畜の「生命」を預かる産業の経営は、二重、三重のご苦労とのたかいかいであろうと拝察致しております。

先月の往復書簡で、地域貢献プロジェクトについて気づいた点を三ほど申し上げましたが、そのひとつひとつについての検証結果と取り組みの思い・動機を丁寧にご説明いただき、一層理解が深まりました。

地域に支えられてノベルズグループのビジネスモデルがあるのに、十勝の基幹産業の農業の将来が見通せない厳しい現実を見据えた結果の結論が耕畜連携であると。

十勝地域のように畜産・畑作混在の農業展開が可能な条件を有しているところでは、誠意的を得た視点だと思えます。

これまでも耕畜連携は政策としても熱心に取り組まれたことがありません。代表的なものが「稲わら」です。結論的に申し上げますと、畜産地帯と耕種（特に稲作）地帯が離れていることで、補助金が出ればその限りで行われ、カネの切れ目が何とやらで、定着せずに終わりました。

十勝地域は畜産、耕種（畑作）が混在する耕畜連携の基盤がしっかりとあるところですが、しかもこのプロジェクトは机上の空論でなく、試行錯誤を積み上げて到達したものです。

そしてキーワードが「地域の農家の方々に目に見える形でメリットを享受していただく」ですから、成功は間違いないと確信しております。

それでも心配症の小生は、畜産をめぐるこれまでの内外の情勢変化の歴史に学ぶところがあるのでとはと考えてしまおうのです。

直接関係ないようにみえる昨今の低迷する石油・原油市況、この背景には米国におけるシェールガス開発の成功があるのです。

電気自動車の普及がエネルギー問題に与える影響も目を離せません。他産業、異業種での技術開発、その応用・発展のスピードは加速してきており、また英国のEUからの離脱、米国でのトランプ大統領候補の勝利など内外の情勢変化は不確実性を増しています。

アンテナを高く張り、あらゆる変化のかすかな萌しにも若い感性で目をこらし、チャンスとしてください。

ノベルズグループの弥栄と十勝農業の発展をお祈りするとともに、素晴らしい佳き新年をお迎えください。

平成28年12月吉日

敬具

高木 勇樹（たかぎ ゆうき）

1943年 群馬県生まれ

1966年 東京大学法学部卒後農林省入省。食品流通局砂糖類課長、大臣官房企画室長などを経て、食糧庁管理部長、畜産局長、大臣官房長、食糧庁長官などを歴任

1998年 農林水産事務次官、2001年退官

2002年 榊農林中金総合研究所理事

2003年 農林漁業金融公庫総裁、2008年同公庫退任

2007年 NPO法人日本プロ農業総合支援機構副理事長

現在、NPO法人日本プロ農業総合支援機構理事長などの立場から、わが国の農業・農村の活性化、食の問題の解決に向けた活動に尽力

